

水田をフル活用した地域農業のモデル法人  
～地域とともに歩んだ25年 徹底したマネジメントで確立した複合経営～

農事組合法人 ビーンズ本楯  
代表理事 飯塚 将人（酒田市）

## 1 受賞者の概要

平成10年に、本楯地区を代表する若き担い手6人で大豆作業受託組織「ビーンズ本楯」が組織化された。その後、平成25年に農事組合法人を設立。大豆の刈取りを請け負う本楯地区唯一の法人として、地域になくってはならない存在である。



構成員と従業員  
(前列右端が飯塚代表)

経営品目：水稲64ha（主食用43ha、醸造用7ha、飼料用14ha）、  
大豆22ha、大豆受託60ha、啓翁桜14a、シャインマスカット9.6a

## 2 特色ある活動

### (1) 大豆の多収・高品質生産への取組み

大豆作による経営安定を目指して、大豆品種「里のほほえみ」を県内でいち早く導入し、多収栽培を実現した。また、全圃場で排水対策を徹底するため、秋・春期にサブソイラーによる耕盤破碎を実施している。

さらに、大豆は大規模栽培であるため乾燥調製施設の荷受け時期と処理量不足が課題であったことから、子実水分を確認したうえで、刈取り後の生豆を一旦仮置きする方法により適期刈取りを徹底し、高品質生産に取り組んでいる。

### (2) 大豆と飼料用米の輪作体系の確立

2年毎に大豆と飼料用米との輪作体系を確立し、大豆栽培による地力窒素の発現を利用して飼料用米の肥料費節減を図りながら、大豆・飼料用米の収量を確保している。高収量圃場への法人独自の「プレミアム加算制度」が地権者の栽培管理の意欲向上につながり、高品質・高収量栽培の実現に至っている。令和3年度全国豆類経営改善共励会で全国農業協同組合中央会会長賞を受賞した。

### (3) 地域内の地権者や別法人との役割分担・連携

地権者が大豆播種前の耕起や除草作業等を行うことで、法人の適期作業を可能にしている。また、地区内のもう一つの大規模集落営農法人と連携しながら大豆作付計画を調整し、地域営農を維持する役割を担っている。



成熟期となった大豆「里のほほえみ」

### (4) 農地の集積・集約化

高齢により離農する稲作農家が増加したことから、法人への農地集積が進んでいる。また、限られた人員で効率的に農地を管理するには集約が必須なため、積極的に農地交換を進めている。

### (5) 園芸品目導入による周年農業の確立と経営の多角化

啓翁桜の導入で周年農業を実現し、この冬期の共同作業は、構成員同士が次年度の春先の計画について話し合い、法人内のコミュニケーションを取る貴重な場となっている。その他、地域の振興品目である、水稲育苗ハウスを活用したぶどう「シャインマスカット」栽培にも取り組んでいる。

## 3 今後の発展方向

役員の子息2名(30代)を今後の役員候補と考えている。また、現在臨時雇用している2名(30代)を法人の組合員に入れることを検討しており、現役の思いを引き継ぐ後継者の育成を図っていく。